

○ 病虫害防除法（大豆）

（ア）紫斑病 *Cercospora kikuchii*

（防除のねらい）

種子伝染をするので健全種子を選び、種子消毒を行う。また、被害茎葉や莢も伝染源となるので処分する。結実期に雨が多く涼しい天候が続いた場合に多く発生する傾向があり、幼莢期から子実肥大期に薬剤散布を行う。

（耕種的防除法）

- （１）り病植物は焼き捨てる。
- （２）被害を受けたほ場は深耕し、表土を地中深くすき込む。
- （３）種子は無病の莢から取る。

（イ）さび病 *Phakopsora pachyrhizi*

（防除のねらい）

発病初期から薬剤を散布する。

（耕種的防除法）

- （１）耐病性品種を選ぶ。
- （２）り病植物を集めて焼き捨てる。
- （３）連作を避ける。

（ウ）葉焼病 *Xanthomonas campestris*

（防除のねらい）

病原菌は種子やり病植物に付着して長期間生存するので、健全種子の使用と、り病植物の処理が大切である。

（耕種的防除法）

- （１）耐病性品種を選ぶ。
- （２）り病植物を除去し、焼き捨てる。
- （３）種子は無病の莢から取る。

（エ）べと病 *Peronospora manshurica*

（防除のねらい）

降雨期に発生が多い。発生を認めたら早目に薬剤散布を行う。

（耕種的防除法）

- （１）密植を避けるとともに多肥にならないように注意し、過繁茂を抑えて通風のよい状態に栽培する。
- （２）種子は健全株から採取する。
- （３）り病植物は集めて焼き捨てる。

（オ）モザイク病 SMV, AMV, BYMV, SBMV, AzMV, BCMV

（防除のねらい）

主にダイズモザイクウイルス（SMV）が発生する。

病株の種子は褐色や黒色斑紋を生ずる。り病種子を播くと種子伝染するが、無病種子でもアブラムシによって媒介される。

（耕種的防除法）

- （１）無病種子を用いる。
- （２）発病初期に病株を取り除く。

（カ）アザミウマ類

（防除のねらい）

世代の生育期間が短い（約２週間）ので、虫の増殖が著しい。被害を認めたら直ちに防除する。

(キ) カメモシ類

(防除のねらい)

5種のカメモシが加害することが知られており、大豆害虫のうち最も重要で防除も困難である。莢の肥大期までに7～10日おきに2～3回薬剤散布を行なう必要がある。

(ク) アブラムシ類

(防除のねらい)

秋大豆での発生が多い。ウイルス病の媒介昆虫であるので、直接の被害よりも媒介防止に重点を置き、飛来初期に防除する。

(ケ) マメヒメサヤムシガ

(防除のねらい)

産卵と幼虫食入の防止をねらう。

(コ) シロイチモジマダラメイガ

(防除のねらい)

産卵と幼虫の食入防止をねらう。

(耕種的防除法)

- (1) 夏ダイズでは被害は一般に早生種に少なく、晩生種に多いので、早生種を選ぶか、播種期を4月上～中旬に早める。
- (2) 秋ダイズではなるべく遅く播く。

(サ) ネキリムシ類

(防除のねらい)

昼間、幼虫は土中に生息しているため、被害株の周辺を浅く掘り起こして捕殺できる。

(耕種的防除法)

雑草が繁茂していると、これに寄生していた幼虫がそのまま残り加害するので、栽培予定ほ場および周辺雑草の防除に努める。水田跡作では、ほとんど被害は見られない。

(シ) ハスモンヨトウ

(防除のねらい)

9～10月に発生が多い。夏大豆の被害は少ない。若い幼虫は集まって食害し、そのため被害葉は白色化するので、このような葉の出現を目安にして薬剤の散布時期を決める。

(ス) コガネムシ類

(防除のねらい)

ヒメコガネが主体である。夏大豆での発生が多い。広食性で、成虫の移動性も強いので広域一斉防除が必要である。株元よりも比較的草冠部に発生する傾向があるので発見しやすい。ほ場をよく見回る。

(耕種的防除法)

草丈の高い品種、毛じ(茸)の白い品種は加害を受けやすい。このような品種をほ場の一部に入れ、誘い集めて、薬剤で殺す方法もある。

(セ) マメハンミョウ

(防除のねらい)

年1回の発生で、7月中旬から9月下旬頃まで成虫が局地的に発生し、ダイズの葉と花房をむさぼり食うので、この時期に巡回し、成虫の加害を認めたら薬剤を散布する。

(ソ) ダイズサヤタマバエ

(防除のねらい)

成虫は開花期から若ざや期にかけて飛来，産卵するので，この時期をねらって防除する。

(耕種的防除法)

夏大豆では，6月末までに開花を終わるように早生種を選ぶか，できるだけ早まき（4月上～中旬）する。

(タ) ダイズクキモグリバエ

(防除のねらい)

夏大豆では特に問題にならない。秋大豆に被害が出る。産卵，幼虫の食入防止をねらう。

(耕種的防除法)

施肥を十分にし，初期生育の促進を図ると被害が軽くなる。

(チ) タネバエ

(防除のねらい)

幼虫の食害による発芽不良を抑えるため，播種時の種子粉衣，または土壌施薬を行う。

(耕種的防除法)

- (1) 未熟堆きゅう肥，鶏糞，油かすなどのにおいに成虫が誘引されて産卵するので，これらを基肥に用いる場合にはなるべく深く埋没，覆土する。
- (2) 同様に，収穫した前作物の残渣で，腐敗によってにおいが出るものがあれば取り除く。

(ツ) センチュウ類

(防除のねらい)

ネコブセンチュウの被害が主で，土壌消毒を行う。

(耕種的防除法)

抵抗性品種を選ぶ。